

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：32206

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13443

研究課題名(和文) 敬語の習得・加齢変化とその話者属性差に関するマクロ社会言語学的モデルの構築

研究課題名(英文) Macro-sociolinguistic study of honorifics adoption affected by speaker's attributes

研究代表者

柳村 裕 (YANAGIMURA, Yu)

国際医療福祉大学・国際交流センター・助教

研究者番号：50748275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の敬語の使用・習得・変化に関する基礎資料の拡大蓄積と、新仮説の提案を行った。国立国語研究所による大規模経年調査「岡崎敬語調査」と、それを継承する新調査による資料の比較分析を行った。その結果、以下の成果を得た。(1)日本語の敬語の個人内での加齢変化パターンには、「成人後採用」と「早期採用」の二つのパターンがあり、各個人がどちらのパターンを示すかは話者属性と関係する。(2)日本語の敬語使用全体として、素材敬語の尊敬語・謙譲語の使用が減少し、「対者敬語化・丁寧語化」が進行中である。(3)以上の成果を外国人日本語学習者の敬語学習・教育に活用するため、学習者の敬語の知識、誤用、問題点を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、世界でも稀な大規模経年調査資料を用いて、敬語習得パターンの話者内・話者間の共時的変異と通時的変化というダイナミックな過程を記述・分析した。これにより、敬語使用に関して、長期スパンに渡る個人内での加齢変化を実時間で捉え、社会言語学分野における実証的貢献を行った。また、日本語の敬語使用全体についても、対者敬語化・丁寧語化という大きな歴史的变化傾向に関わる現象を実証的に記述した。これは日本語の敬語論・敬語史分野における大きな学術的インパクトを持つ。さらに、社会的意義としては、以上の成果を敬語教育分野へと応用することで、外国人日本語学習者に対する敬語教育への貢献を行った。

研究成果の概要(英文)：We conducted a research on the usage, acquisition, and change of Japanese honorifics. We accumulated an extended data on Japanese honorifics and proposed a new hypothesis. A comparative analysis was conducted on materials from the Okazaki Survey on Honorifics, a large-scale longitudinal survey conducted by the National Institute for Japanese Language and Linguistics, and the new survey that succeeded it. The following results were obtained. (1) There are two patterns of intra-speaker age-related change in Japanese honorifics: "late adoption" and "early adoption," and which pattern each individual exhibits is related to speaker's attributes. (2) The use of "respectful" and "humble" forms, i.e., honorifics for the person in a sentence, has been decreasing over the survey period. (3) Applying the above results to honorific education for foreign learners of Japanese, we analyzed the learners' knowledge, misuse, and problems with honorifics.

研究分野：社会言語学

キーワード：敬語 敬語教育 日本語教育

1. 研究開始当初の背景

国立国語研究所では1953年、1972年、2008年の3回にわたり、愛知県岡崎市において、日本語の敬語の使用とその変化に関する大規模経年調査「岡崎敬語調査」を行ってきた（国立国語研究所1957、1983、2010）。これは、同一地域の話者を対象にした長期間の追跡調査により、敬語と社会の関係を巨視的に捉えるマクロ社会言語学的研究である。追跡調査の期間、調査対象の地理的範囲・人数、いずれも国内最大規模の、世界でも類を見ないオリジナルな調査研究である。

この調査で得られた最も重要な知見の一つは、敬語の「成人後採用 late adoption」である（井上他2016）。言語形成期に獲得される音韻や基礎語彙などと違い、敬語は成人後に採用・習得される。話者の加齢に伴い敬語使用数が増加するという、個人内の言語形成期以降の変化である。この現象は岡崎敬語調査の特色を活かすことで初めて実証された。

一方で、その後の研究（柳村2017）では、敬語の習得・変化のパターンが、話者の社会的属性によって異なることが分かってきていた。例えば「ゴザイマス」という敬語形式は、話者属性を考慮せずにサンプル全体で見ると、上述の通り成人後採用が観察される。ところが話者の社会的属性の一つである「職業」を考慮すると、職業ごとに異なるパターンが観察された。同一の敬語形式であっても、話者の職業によって、その生涯における習得時期や使用数の加齢変化パターンが異なるのである。

以上より、次の仮説が浮かび上がる。すなわち、敬語の習得には二つのパターンがあり、そのどちらに当てはまるかは話者の属性によって異なるという仮説である。一つは成人後採用であり、もう一つは敬語がより早い時期に習得され、個人内での言語形成期以降の変化が見られないパターンである。後者を「早期採用 early adoption」と呼ぶことにする。早期採用は、言語形成期（あるいはそれ以降の比較的早い時期）における獲得とその後の不変化という、一般的・通説的な言語変化パターンにあたる。

この仮説を検証するため、本研究では、岡崎敬語調査資料の再分析を行った。また、実証的資料を拡大蓄積するため、岡崎敬語調査を継承する新たな調査を実施した。これにより、個人内での敬語の習得・使用・変化のパターンを詳細に記述し、話者の社会的属性と関連付けられた二つのパターンで捉えるモデルを提案した。

2. 研究の目的

岡崎敬語調査資料に追加調査資料を加えた「拡大岡崎調査資料」を収集・作成し、その整備・分析を行う。発話資料中に現れる「デス」「マス」「ゴザイマス」「イタダク」「イラッシャル」などの各種敬語形式の使用数を集計・分析し、敬語の習得時期、加齢変化パターンとそれらの話者属性差を記述するための大量の基礎資料を蓄積する。

蓄積された基礎資料を基に、敬語形式および話者属性ごとに、個人内での敬語の習得・使用・変化のパターンを分析する。特に、成人後採用と早期採用のどちらが観察されるか、あるいはそのどちらとも異なるパターンが観察されるかを探索的に検討する。

3. 研究の方法

過去の岡崎敬語調査と同一内容の追加調査を実施した。発話資料中の各種敬語形式の使用数の変化を「見かけ時間」および「実時間」で分析し、個人内での敬語の習得・変化パターンを記述した。

過去の調査資料は、3回の調査（第一次：1953年、第二次：1972年、第三次：2008年）のそれぞれ約400名、合計約1,200名の話者について、12種類の設定場面における発話回答データと、発話者の生年、性別、学歴、職業などの社会属性項目が含まれる。これらは国立国語研究所から公開されているものを利用する。一方で、これらと同一調査内容・項目を用いた追加調査を新たに実施し、第三次岡崎敬語調査以降の変化を調べた。

上記資料の発話回答データを分析し、個人内での敬語の習得時期および敬語使用の加齢変化パターンを記述した。この記述は、各種敬語形式の使用数の変化を「見かけ時間 apparent time」および「実時間 real time」で分析することで行った。まず、発話中の各種敬語形式、例えば「デス」「マス」「ゴザイマス」「イタダク」「イラッシャル」等の使用数を集計した。各形式の使用数が話者の（調査時点での）年齢によってどう異なるかを見ることで、各敬語形式の使用数の「見かけ時間上の変化」を観察・記述した。また、特定の年代生まれの話者について第一次～三次および追加調査の結果を比較することで、各種敬語形式の使用数の「実時間上の変化」を直接的に観察した。以上により、各敬語形式について、話者の加齢による使用数の変化パターンおよび生涯における習得の時期（年齢）を分析した。以上2種の分析を種々の話者属性ごとに行うことで、敬語の習得・変化過程の類型化と、それと話者属性との関係を考察するための基礎資料を蓄積した。

さらに、以上の資料収集および分析を、外国人日本語学習者に対しても行った。敬語に関する学習者の知識と運用を分析し、また、母語話者の結果と比較することで、学習者の敬語使用における誤用、問題点、困難を明らかにした。以上をもとに、日本語教育分野における敬語の学習項目や、有用な指導・学習方法を検討した。

4. 研究成果

(1) 話者属性による敬語習得パターンの差異

職業などの話者属性ごとに、各種敬語形式の使用数の変化を「見かけ時間」および「実時間」で分析し、個人内での敬語習得・変化パターンを記述した。その結果、敬語の習得時期およびその後の敬語使用特徴の加齢変化パターンが、話者の属性によって異なることを明らかにした。

分析対象とした敬語形式は、その丁寧さに応じて二つのグループに分類した。丁寧さが比較的低いといえる「デス」「マス」などの形式（いわゆるデスマス体）のグループと、丁寧さの高い「ゴザイマス」および「テイタダク」などの素材敬語のグループである。分析対象とした話者属性のうち、結果に関わる重要なものは、「性別」「学歴」「職業」である。

各種敬語形式のうち、丁寧さが比較的低いといえる「デス」「マス」などの形式は、話者の加齢に伴い使用数が減少した。一方、丁寧さの高い「ゴザイマス」「テイタダク」などは加齢に伴

い使用数が増加した。デスマス体は個人の生涯における早い時期に習得され、より丁寧な形式の習得に伴い使用数が減少すると解釈した。

また、以上の敬語の習得・変化パターンに話者属性差が認められた。丁寧さの高い敬語形式の使用数が増加に伴い大幅に増加する属性（女性、接客系職業）と、そうでない属性（男性、事務系職業）があった。職業などの話者属性によって、敬語の習得、使用、変化が異なることを示す結果であった。この結果から、話者の社会的属性・立場に応じて、敬語を多く使う話者ほど習得が進み、より多くの敬語を使用するようになるという解釈を提示した。以上は、日本語の敬語の個人内での変化（個人の生涯における加齢変化）の分析である。

(2) 素材敬語使用の減少

一方で、個人内でなく、日本語の敬語使用全体の変化傾向についても分析を行った。日本語の敬語のうち、素材敬語すなわち尊敬語と謙譲語に着目し、その使用数の変化を集計・分析した。その結果、3回の岡崎敬語調査が行われた期間において（1953年～1972年～2008年）、素材敬語の使用数が減少していることが分かった。これは、実時間上の比較だけでなく、3回の調査のそれぞれにおける見かけ時間の変化の分析からも、同じことがいえる。

この事実は、日本語の敬語の対者敬語化・丁寧語化という歴史的变化傾向の現れであると解釈した。すなわち、話題の人物への敬意を表す素材敬語の使用が減少し、話し相手への敬意を表す対者敬語的な表現形式とその使用が増加するという変化である。素材敬語は、その一部が機能を変化させ、対者敬語すなわち丁寧語的用法が増えていることがすでに知られていた。本研究では、こうした機能的側面の変化だけでなく、使用数の側面についても素材敬語が衰退し、日本語の敬語全体として丁寧語化という変化が進行中であることを明らかにした。

さらに、以上の過去の岡崎敬語調査結果と、本研究の追加調査の話者群（首都圏在住、若年層、学生）を比較した。その結果、素材敬語（尊敬語と謙譲語）の使用の減少と、敬語の使い分けの幅の縮小が観察された。これらは、岡崎敬語調査の成果の中ですでに指摘されていた変化、すなわち、敬語の「対者敬語化」と「単一化・画一化」の変化の一部とみなせる。この結果は、岡崎敬語調査の実施期間（1953年～2008年）に観察された変化が、その後の期間にも、そして他地域でも、進行していたことを示唆する。

(3) 日本語教育への応用：日本語学習者の敬語知識と使用

尊敬語・謙譲語・丁寧語といった敬語語彙の知識を問い、回答を母語話者と比較した。その結果、母語話者よりも正答率は低いものの、尊敬語・謙譲語を正しく回答する傾向が認められた。また、敬語の使用については、尊敬語・謙譲語を適切な場面で使用するかどうか、尊敬語と謙譲語のどちらを使用するか等の点において、誤用といえる使用が多かった。以上2点を総合すると、学習者は、敬語語彙の知識自体は持っているものの、その使い分けに困難があるといえることがわかった。

<引用文献>

井上史雄・阿部貴人・鎌水兼貴・柳村裕・丁美貞(2016)『敬語表現の成人後採用 岡崎における半世紀の変化』国立国語研究所「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」報告書.

国立国語研究所(1957)『敬語と敬語意識』東京:秀英出版.

国立国語研究所(1983)『敬語と敬語意識 岡崎における20年前との比較』東京:三省堂.

国立国語研究所(2010)『敬語と敬語意識 愛知県岡崎市における第三次調査』科学研究費補助金研究成果報告書,第1~4分冊.

柳村裕(2017)「話者の職業による敬語使用の差異と変化 岡崎敬語調査資料の分析」『国立国語研究所論集』第12号,pp. 205-225.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柳村 裕
2. 発表標題 敬語の習得時期とその話者属性差：岡崎敬語調査資料の分析
3. 学会等名 日本語学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柳村 裕
2. 発表標題 日本語の敬語の機能の変化 愛知県岡崎市における尊敬語・謙譲語使用の減少の事例
3. 学会等名 日本語学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------